

愛知県犬山市×都市デザイン＝ 地域の記憶を未来の創造へつなぐ

服部 敦（はっとり あつし）

中部大学工学部都市建設工学科
教授・工学博士



①犬山のシンボルともいえる、国宝犬山城と趣を残す城下町
②「犬山フルまちミュージアム 2026」のチラシ



近現代の出来事は「まだ皆が覚えている」と思われているうちに、記録されないまま忘れられていく。中部大学教授の服部敦さんは、そうした近い時代の地域の記憶を掘り起こし、アートを「転換装置」として新たな創造や空間へつなぐまちづくりを研究する。地元の愛知県犬山市で4年目を迎えた「フルまちミュージアム」もその実践の一つだ。2026年8月、市内の博物館をはじめ、観光・文化の関係者が集うワークショップが開催され、継続的な活動基盤づくりの一步が踏み出された。

歴史を未来のまちづくりへ

——「うちの町には何もない」と謙遜される地域は非常に多いのですが、どのようなところでも掘り起こせば必ず未来につながる語りやストーリーを見つけることができます。

中部大学教授の服部敦さんはそう語る。服部さんは都市デザイン・地域プランニング・まちづくりを専門とし、地域の歴史的な財産をまちづくりにつなげる研究を行っている。ただし服部さんが注目する「歴史」は、一般にイメージされるような江戸時代やそれ以前ではない。近代から現代にかけての比較的新しい歴史である。20年、30年、あるいは50年前といった近い時代の出来事は、「まだ皆が覚えている」と思われているうちに、記録されないまま忘れられていく。行政の「正史」に残る出来事だけでなく、人々の記憶や地域に残る痕跡を掘り起こし、それらを共有し、未来の活動や創造につなげる必要があると考えている。

その背景には、服部さんの災害伝承施設の研究も関係している。東日本大震災の被災地を巡り、町の姿が失われても、暮らしや営みの記録が残っていれば、復興の手がかりになりうることを知った。この研究をとし、過去の記録を残すことは、未来をつくるためでもあることが示された。

こうした課題意識から、服部さんはこれまで、沖縄では地域に残る近代以降の遺跡の由来や価値を掘り起こし、文化財や観光資源、地域の誇りへとつなげる取り組みを行ってきた。また愛知県の高蔵寺ニュータウンでは、約50年前の開発時にどのような構想や工夫があり、現在の空間が形づくられたのかを再発見し、それを新たな都市計画につなげた。

空地や跡地が生じる場合でも、すぐに新しい建物を作るという発想は時代遅れになってきていると服部さんは考える。特に重視するのは、掘り起こしたものを最終的に「空間的な創造」へとつなげることだ。

歴史や記憶を調べ、「こんなことがあった」と確認するだけでは、郷土史の共有で終わりがかねない。そこで「記憶」から「創造」の「転換装置」となりうるものがアートだと、服部さんは考えている。しかしそれはいわゆる「アートで町おこし」ではない。

アーティストが資料を作品へ昇華することは「転換装置」の象徴だが、創造活動の担い手は専門家に限らない。一般の人にもふくめた地域の担い手が、アート活動を媒介として、都市の記憶を新たな創造行為へ転換する。それをいかに実現していくかが、研究課題だ。

地元・犬山で始まった「フルまちミュージアム」

服部さんが愛知県犬山市で展開している「フルまちミュージアム」

のプロジェクトもそうした試みの一つだ。犬山市は服部さんの出身地で、現在、暮らす町でもある。犬山市には国宝犬山城や山・鉾・屋台行事がユネスコ無形文化遺産にも登録された犬山祭があり、近年、城下町を中心に多くの観光客が訪れている。その一方で、地域に積み重なってきた文化や歴史が市民に十分共有されず、観光客もその背景を体験しないまま帰っていくという課題を、服部さんは感じていた。

そこで、犬山市の観光戦略づくりに参画した際、資料調査や聞き取りで得た生の情報を、アートや展示の力で咀嚼し、創造活動へ転換するという構想を提案、市職員とともにデザイナーやキュレーターなどへ声をかけ、活動を開始した。これが「フルまちミュージアム」の始まりだ。

活動は今年（2026年）で4年目になる。1年目は、観光客が集まる城下町周辺にある知られざる場所や観光資源に光を当て、ヒップホップフェスなど多様な企画を行った。2年目は世界最大級のサル類動物園である日本モンキーセンターの歴史に焦点を当てた。

3年目は同センターに隣接するモンキーパーク内にある岡本太郎の「若い太陽の塔」をめぐる歴史を掘り起こした。すると、一見すると何の関わりもない、博物館明治村や野外民族博物館リトルワールドという犬山市の文化施設に共通する歴史が見えてきた。これが4年目の活動につながった。



③犬山城に近い「城とまちミュージアム」の企画展「昭和時代の犬山」のトピックコーナーにて展示された「犬山と岡本太郎と万博 EXPO'70」

つながりを生むプラットフォームへ

フルまちミュージアムのユニークな点は研究者、デザイナー、キュレーターなど、異なる職能をもつ犬山市のメンバーがそれぞれの思いや目的を抱き、並列的に参加している点だ。今回の研究テーマは服部さんからの持ち込みだが、そこからどのような活動をするかは、メンバー同士の議論から生まれる。その多様性が豊かな発想を生むと服部さんは考える。

メンバーの一人、キュレーターで川崎岡本太郎美術館元学芸員の楠本亜紀さんは、「犬山にいるからこそ触れられる一次資料や人々の記憶を掘り起こせることに面白さを感じている」と話す。城だけではない犬山の近代以降の文化の厚みを、記録し伝えていきたいという。

また、クリエイティブディレクターでプロダクトデザイナーでもある戸田祐希利さんは、これまでの経験から「地域の人には当たり前のものも、外から見れば大きな文化的価値を持つことがある」と感じている。戸田さんは「プロダクトデザインで培った価値の伝え方の視点を生かし、展示をとおして犬山の新たな魅力を見える形にしたい」と語った。

これまでの活動は「最低でも年に一つは何かをする」という形で行われてきたが、4年目の今年は前田記念工学振興財団の助成を受け、活動を集中的かつ体系的に進めることとなった。具体的には、「若い太陽の塔」と犬山市の文化施設のつながりを紐解く企画展示「犬山と岡本太郎と万博 EXPO'70」を皮切りに、日本モンキーセンター、明

治村、リトルワールドの3施設の連携を深めることを目指す。各施設に眠る収蔵物や知識を結びつけ、年1回のイベントでは構築しにくかった関係を、連続的な展示やワークショップによって育てていく予定だ。そして、今後の継続的な活動基盤を構築する。



④吉田憲司・国立民族学博物館前館長による基調講演



⑤基調講演後は2グループに分かれ、熱いディスカッションが続いた

活動の先にある「空間」

その第一段階として、8月22日、23日に関係者らによるワークショップが開催され、市内の博物館をはじめ、観光・文化に携わる関係者が集まった。初日の基調講演では国立民族学博物館前館長の吉田憲司さんを招き、犬山の文化施設の成り立ちに通底する民族学との関係をたどった。ディスカッションでは参加者が2グループに分かれ、「犬山の文化観光を考える」をテーマに、犬山市の観光課題を熱く掘り下げた。翌日のリトルワールドでのエクスカージョンは一般参加者も加わって盛り上がり、関係者の結束も強まった。

活動の出口の一つとして、犬山の歴史や文化を発信し、市民の創造活動の場ともなるギャラリー的な場所の創設を考えている。しかしそれは、公共施設のようなものではない。まず市民による活動を生み、それを継続させ、その先に「拠点が必要だ」という機運が生まれたとき、民間の助成なども活用しながら空間化していくことを考えている。歴史や記憶は、保存されるだけの対象ではなく、次の活動や空間を生み出す契機にもなりうる。服部さんの研究は、過去と未来をつなぐまちづくりのあり方を、犬山市などでの実践をとおして問い続けている。



⑥翌23日、野外民族博物館リトルワールドでのエクスカージョン

講演+ワークショップ「EXPO'70から犬山の文化観光を考える」

「フルまちミュージアム—地域における「記憶→創造」転換装置としてのプラットフォームの構築—」のプロジェクトの一環として、犬山市の博物館をはじめ、観光・文化に携わる関係者らのつながりを育てるためのワークショップが開催された。

ワークショップ実施日：2026年8月22日、23日

場所：犬山くーまる・野外民族博物館リトルワールド

参加者：犬山市の博物館の学芸員、観光・文化団体の関係者、市職員、フルまちミュージアムのメンバーなど約30名。

※本研究とワークショップは、**（公財）前田記念工学振興財団**の令和8年度研究助成（地域工学分野）を受けて実施されています。